

◆ 平成 20 年度（前期）県立広島大学 学部・学科・研究科（専攻）等による FD 活動（教育改善）報告一覧

実施主体	コーディネーター	日・時	実施場所	実施内容
人間文化学部 健康科学科	学科長：三浦 朗 学科 FD 委員： 岩本 珠美 菅原 芳明	①4月1日～4月30日	特に定めない	<p>実施目的： 学科における「教育改善」を目的として、2007 年度後期「学生による授業評価」に対する担当教員コメントの集計結果について、学科教員全員で共有化すると共に、平成 20 年度「第 1 回 学科学科 FD 研修会」と位置づける。学科全教員が参加して行なうものである。（11 名から出された意見感想については次のとおりであった。）</p> <p>A さん 健康科学科の「総括コメント」を見、また、各先生方のコメントを見るにつけ、健康科学科の講義、実験・実習は、おおむね学生の満足を得ていることがうかがい知れました。先生方が、実験・実習の事前の準備を十分にされ、シラバスにより、実験の計画を十分に周知して臨んでおられることをあらためて実感し、私も、これまで以上に、準備を怠らないようにしたいと感じた次第です。また、「レポートや宿題・課題に対する適切な指導」については、私自身は、ポイントが高くなかったので、反省し、学科の平均を下げないように、努力したいと思いました。</p> <p>B さん 授業評価のコメントの共有化を F D 研修会とすることで、重みができますね。「学科教員コメント集計とその集計情報の共有化」として授業評価のコメントを活用するのは良いと思います。先生方のコメントをみて、自身の授業改善の参考にもなりますが、学生の様子やクラスの雰囲気などもなんとなくわかり、参考になります。</p> <p>C さん 従来、つまり「学生による授業評価」が始まったばかりの頃、「学生による授業評価」と言うものは、学生達から「授業改善」に関わる”山“のようなコメントが出され、私自身は、その量、内容さらには意気込みに、心底、感謝・感激であった。寄せられたコメントの一つ一つが、翌年の「授業改善」にほんとうに役に立った……。半期の授業を通して感じた彼女達（当時は女子大であったので）の「授業改善」への率直な思いが、それらコメントの一つ一つから溢れるごとくであった……。時代（時期）が確かに在った。「時」が経ち、授業に対するコメントは激減！！コメントはあって 1～2。「コメントなし」も常態化……。している。このような状況下、いわば、「12 項目に関わる評価ポイントのみが一人歩き」と感じているのは、私、だけだろうか？ 個人的な「見解」ではあるが、その「ポイントの一人歩き」は、まったく感心しない。「感心はしない！！」と頑なに思いつつも、最近、若干の変化……。もあり。つまり、それらポイントのアップ・ダウンに一喜一憂するのではなく、それらの「評価」を、例えば、私と私の授業を受講した学生一人一人との「コミュニケーション」の一貫として捉える。そうするならば、「話」は違ってくるのではないかということである。 今回、学科委員の手になる学科総体としての「講義・演習科目」ならびに「実験・実習科目」の方向性を示すレポートが出された。学科全体としての「講義・演習科目」の特色として、1)適</p>

			<p>切な難易度を旨とする授業, 2)授業内容の理解に役立つ教科書や適切なプリント等の補助教材の使用を旨とする授業, 3)学生に課すレポートや宿題・課題に対しては,適切なフィードバックや指導を旨とする授業, そして, 4)総合的に判断して“満足度の高い”授業を提供出来ている・・・のではないかとの分析結果を出している。一方, 実験・実習科目については(学科全体として), 1)学生に対して, 実験・実習の目的や内容また成績評価基準等を適切に提示すると共に, 2)教員個々は, 実験・実習の事前の準備を十分に成し, また 3)教科書や実習書やシラバス等により, 学生に対して, 実験・実習の内容を周知させた上で, 4)円滑な実験・実習の遂行・実施を旨としていること, 5) 実験・実習に使用した器具・設備の適切性が保証されていること, 6)実験・実習時間に対して適切な実験項目数が保証されていること, さらには 7)学生に課す実験・実習レポートに対し, 適切なフィードバックや指導がおこなわれている・・・としている。</p> <p>私自身の今回の評価成績ならびに上記の学科総体としての方向性の双方を睨みつつと言うことではあるが, 私の授業に対する「学生による授業評価」を含め, 学生達とのコミュニケーションを出来るだけ密にすると共に, つまりは, 毎年度の授業評価各項目のポイントのアップ・ダウンに一喜一憂することなく, 上記のような学科全体の方向性に少しでもプラスになるような授業運営を心がけたい。</p> <p>Dさん</p> <p>へそ曲がりの意見になるかも知れませんがご勘弁下さい。</p> <p>「理解しやすい」ということについて, どれだけ学生が勉強してきているか。教える側が 5 が難しいかなと考えている事柄が 3 位になるようにダウンして教える。そしたら理解しやすくなるが その授業の全体の知識や内容がかなり低めに押さえられることになる。(ここまで書いて, 授業評価のことが出てきた最初の頃議論したことが思い出されました)</p> <p>あなたにとっての授業の進度, これも, どう考えて良いかわからない。</p> <p>資格取得という点から考えれば, 国試で出題される範囲は, 授業で網羅されていることがひつようなので, 理解しやすさとか授業の進度というのは全く意味をなさなくなってくる感じがします。この辺が資格を標榜している大学が, 痛し痒しの想いをしている部分ではなかろうか。</p> <p>以上, あまり, 発展的な意見でなくて申し訳ありません。</p> <p>Eさん</p> <p>学生の授業評価アンケートは, 自らの教師力を向上させる上で格好の道具であり, その結果は次年度に向けて何を重点的に改善すべきか, 自らの方向性を掴むことができた。授業は学生と教員の双方向のやりとりで成り立つものであり, そのためにも学生の授業への意欲的な取り組みを促す方策を検討し, 授業を改善していきたい。</p> <p>Fさん</p> <p>講義, 実験ともに, 受講生の興味や関心が均一化されている場合は学生の満足度も高く, 難易度も問題なく教えられるという傾向にあると思われる。ヘテロな学生に対しての取り組みには苦労されていると感じた。工夫されている種々の取り組みは大変参考になった。また, 実験の手順についての説明も, 理解度が低い学年もあるし, 一言も聞き逃さないぞという意気込みを感じる</p>
--	--	--	--

			<p>学年もある現状で、授業評価の必要性を感じながらも、また別の尺度で見ることも必要ではないかとも感じた。</p> <p>Gさん 昨年度の私の授業では、専門性が近い助教のA先生に、実際に私の講義を聴講してもらいました。私個人のFDとしては、実に貴重な体験でした。また、昨年度から、授業で使用したすべてのパワーポイントのファイルならびに配布した資料、まとめ、課題といったプリント類のファイルを、本学サーバ上で公開し、受講の学生達への便宜を図ったつもりです。この事に対しても、幾人かの先生から（助教の先生方はよくチェックされておられるものと感心しました）貴重なコメント（FD活動）をいただきました。</p> <p>以下は所感（上記とは別の）です。</p> <p>個人的に気になる点は、ゆとり教育という世代的なものが背景にあるのかどうか、私自身把握できていませんが、学生達の興味が（学年による濃淡も当然ありますが）、10年余り前の赴任時に比較して、かなりheteroになってきているのではないかと感じています。従って、そのようにheteroな興味をもつ学生達のどの層に向け、どのような講義を展開したら良いのか、どのように授業内容を構築したら良いのか、実は、大きな悩みとなっています。このことは、私だけではなく、今回、他の先生方のコメントにも同様のニュアンスが見てとれます。</p> <p>また、一般的な傾向として、input-outputの関係のみに興味（関心）をもつ学生達が増えてきたのではないかと感じています。例えば、授業の中で「メカニズム」に話が及ぶと、「それは自分たちが取り扱うテリトリーではない」という感じの態度がありありと出て、「メカニズム」の話が出た途端、急速に興味を失う学生が少なからずいるという気がするのです。この点は、1年生の早い段階で、「リサーチリテラシー」の重要性を教える必要があるのかなと感じています。</p> <p>さらに、「実験・実習」について、実験・実習に興味がある学生さんとそうでない学生さんの開きが大きくなっているのではないかと感じています。例えば、「答えのないような実験」（2つの変数間でそれらの関連性が有意と出たり出なかったりするような実験）には、まったく興味をもたない（もてない）層が出てきていて、無視できない（相当な）数になりつつあるということです。その点について、学生達に尋ねると、『そういった場合にどうしていいのかわからない』という答えがたびたび返ってくるのです。このことに関しても、入学後の早い段階で、例えば、ヒトを対象とした、いわゆる調査・実験の計画やその統計的な処理・判断といった概念（基礎）を、系統的に、教えておく必要があるのではないかと感じています。</p> <p>冗長かつ雑駁な内容ですが、このあたりで。</p> <p>Hさん 集計した授業評価コメントについて、学科教員と共有化し、FD研修会に位置付けるとの提案に賛成します。まさに、FD研修だと思えます。</p> <p>Iさん 実験実習についてのみのコメントを簡単に示します。 全体を通して、説明や配布資料が解かりやすいなど、実験の内容や手順を事細かに指示してほ</p>
--	--	--	---

				<p>しいとの要望が強く見受けられる。もちろん、学生の要望に沿う事も重要であるが、全てを細かく提示することが、学生の本当の意味での力になるのかという点については疑問が残る。また、レポートの考察は、結果や感想に留まっている学生が多く見受けられる。考察という意味自体が理解できておらず、結果に基づいて考えることに慣れていない、あるいはその力がない学生に対してどのように指導していくべきかを FD 研修を通して学んでいきたい。</p> <p>Jさん 学科教員コメントへの感想ですが、全体的には自分の講義対しいい反省になり、今後の対応に役に立てたいと思います。前にも指摘しましたが、平均と比較するところには、少し違和感を感じますが、それなりに各自がうまく利用すればいいのではないかと前向きに考えたいです。</p> <p>Kさん 担当教員コメント集計結果の学科内への“公表・共有化”非常に有意義だと思います。短いコメントですが、学科の先生方の日々の授業で悩み・奮闘する姿が伝わってきます。個人的な意見で恐縮ですが、新参者の私にとっては、健康科学への帰属意識が、さらに深まる重要な営みの一つであります。“公表・共有化”は、“競争・序列化”と違い、構成員の同僚性を育みつつ、構成員のモチベーションを高めるものだと思います。 そもそも教育実践に、正解や完成形は存在しません。また、学生の評価やそこでの数値は重要な手がかりの一つではありますが全てではありません。こうやって、みんなで授業評価の結果とコメントを公表・共有化し、切磋琢磨するとともに、お互いの弱点をカバーし、学科全体の、教育システムを常に変化・発展させ続けること（力動性）が重要なのだと思います。「FD研修会」というのは、このようなシステムのダイナミックな力動性こそが命だと思います。個々人の専門性や持ち味を無視した、数値を絶対視した一面的な“競争・序列化”では、決して力動性は生まれません。“担当教員コメント集計結果の学科内への公表・共有化”は、力動性を保障する重要な営み（条件）の一つであると思います。</p> <p>2008年度オリゼミ時に、「オリゼミ健康科学シンポジウム」と題して、1)『「学生による授業評価」ーその後』ならびに2)『今後の教育の方向性』と題するプレゼンテーションを実施し、シンポジウム参加者に対して以下のアンケート調査を行った。 なお、オリゼミ参加者予定者数は、新入生 37 名、2～4 年生 105 名、大学院生 19 名、教員 20 名の計 181 名であったが、会後に集まったアンケートの総数は 94 枚（内、コメント記載のアンケートの枚数は 67 枚）。本報告書は、これら 94 枚のアンケートに基づいた集約の結果である。（各プレゼンテーションに対するコメントについては省略。） Q1. 『「学生による授業評価」ーその後』のプレゼンテーションには、役に立つ（or 有用な）インフォメーション・視点・論点がありましたか（or 含まれていましたか）？ （計 94 名）</p> <table border="1" data-bbox="1131 1249 1888 1412"> <tr> <td>1) 強くそう思う</td> <td>7名</td> <td>7.5%</td> </tr> <tr> <td>2) そう思う</td> <td>70名</td> <td>74.5%</td> </tr> <tr> <td>3) そう思わない</td> <td>16名</td> <td>17%</td> </tr> <tr> <td>4) まったくそう思わない</td> <td>0名</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>未記入</td> <td>1名</td> <td>1%</td> </tr> </table>	1) 強くそう思う	7名	7.5%	2) そう思う	70名	74.5%	3) そう思わない	16名	17%	4) まったくそう思わない	0名	0%	未記入	1名	1%
1) 強くそう思う	7名	7.5%																	
2) そう思う	70名	74.5%																	
3) そう思わない	16名	17%																	
4) まったくそう思わない	0名	0%																	
未記入	1名	1%																	
		<p>②5月15日 13:15～14:30</p>	<p>大講義室</p>																

				<p>Q2. 『今後の教育の方向性』のプレゼンテーションには、役に立つ (or 有用な) インフォメーション・視点・論点がありましたか (or 含まれていましたか) ? (計 94 名)</p> <table border="1"> <tr> <td>1) 強くそう思う</td> <td>18 名</td> <td>19%</td> </tr> <tr> <td>2) そう思う</td> <td>73 名</td> <td>78%</td> </tr> <tr> <td>3) そう思わない</td> <td>0 名</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>4) まったくそう思わない</td> <td>0 名</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>未記入</td> <td>3 名</td> <td>3%</td> </tr> </table>	1) 強くそう思う	18 名	19%	2) そう思う	73 名	78%	3) そう思わない	0 名	0%	4) まったくそう思わない	0 名	0%	未記入	3 名	3%
1) 強くそう思う	18 名	19%																	
2) そう思う	73 名	78%																	
3) そう思わない	0 名	0%																	
4) まったくそう思わない	0 名	0%																	
未記入	3 名	3%																	
保健福祉学部 看護学科・教育課程 検討会	松森 直美	<p>①4月23日(水) 10:40~12:10 ②5月23日(金) 16:20~17:50 ③6月26日(木) 16:30~18:00 ④8月1日(金) 16:30~18:00 ⑤9月17日(水) 13:00~14:30</p>	3416 教室 計 9 名	<p>テーマ：看護学科の教育課程における実践的教授法の見直しと再構築 学生の看護実践能力を強化するための教育課程の精選を行うと同時に教員の指導力の向上を図る目的で、各看護領域における専門科目の教授内容の中でも特に看護過程・看護技術演習の教授内容・方法の検討を行なった。 基礎看護学，成人看護学，老年看護学，精神看護学，母性看護学，地域看護学，小児看護学の各領域の代表者が、それぞれの科目における講義形式，内容，基本としている看護理論，強化ポイント，学生の反応等を報告し，意見交換を行った。 課題として，グループワークの編成や各領域の看護過程演習の実施時期の重複状況の調整によって学生のモチベーションを維持すること，実践をイメージしやすく工夫すること，各看護領域間の整合性を明らかにすることなどが明確となった。</p>															
保健福祉学部 理学療法学科	清水 ミシェル・ アイズマン	<p>① 8月18日 (月) 15:00~17:30 ② 毎週水曜日学科会議内 14:40~16:10 ③ 毎月第2水曜日 学科会議前</p>	<p>① 1207 会議室 ②③ 2416 会議室 ① 教員 12 名，臨床 実習指導者 8 名 ② 学科全教員 (16 名) ③ 学科教員なら びに時に他学科の 教員の参加もあり</p>	<p>テーマ：①基礎臨床実習 I に対する臨床実習指導者会議 ②学生支援に関する検討会 ③学科勉強会 ① 臨床実習指導者に対し，基礎臨床実習 I の目的と実習要項について確認を行った。昨年の実習反省会の内容を報告し，より良い実習のあり方を 2 グループによるグループワークを行い，大変有意義な討論が交わされた。 ② 支援が必要な学生の対応策を学科教員で検討した。 ③学科教員による勉強会の開催。開催 1 週間前にテーマ，担当者について学部内全教員にメールを送り，学科以外の教員の参加も募っている。その内容は教育から最新の研究テーマ，抄読会と多岐にわたる。</p>															
保健福祉学部 作業療法学科	近藤 敏 田端 幸枝	7月23日 (水) 12:30~13:00	<p>2416 会議室 作業療法学科教員 14 名 (学科教員合 計数 15 名中の 93%) 参加できなかった 看護学科教員 1 名 に資料配布</p>	<p>テーマ：作業療法士教育における FD 研修 1 学科の FD 活動に対する動機付け強化のために，作業療法学科教授が専門領域に関連する講演をした。講演終了後に活発な質疑応答及び意見交換が行われた。 講演のテーマ：「高等教育段階における発達障害学生の理解と支援」 講師：土田 玲子 (保健福祉学部 教授) 内容：1. 日本 LD (学習障害) 学会作成の啓発用パンフレットの紹介 日本 LD 学会は大学で学ぶ発達障害学生の理解と支援のためのガイドを作成した。教員向け，学生向け，相談機関向け，事務職員向け，の 4 種類がある。 2. 高等教育段階における発達障害学生支援の根拠 2005 年に発達障害者支援法が施行され，「大学および高等専門学校は，発達障害者の障害の状態に応じ，適切な教育上の配慮をする」と成文化されている。 3. 支援についての基本的な考え方</p>															

				<p>発達障害は「見えなさ」「典型例のなさ」「当事者自身も障害等を認知・受容できない」という難しさがある。このために、大学においても環境と当事者双方に対して積極的に働きかける必要がある。積極的に肯定的な理解と本人の意思を尊重した教育環境を整えることが重要である。</p> <p>4. 当大学の実践（案）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 啓発活動の実施：教員および学生 2) 実態把握 3) 支援体制の構築
保健福祉学部 コミュニケーション障害学科	吉畑 博代	<p>1-1)：7月30日(水) 16:20～17:50</p> <p>1-2)：9月9日(火) 10:00～11:30</p> <p>2：8月4日(月) 8月6日(水) 8月7日(木) 各 18:00～19:00</p>	<p>1-1)：1207 会議室 1-2)：4 号館 1 階講義室</p> <p>2：4 号館 5 階大学院セミナー室</p> <p>1-1)：コミュニケーション障害学科から、発表者1名、参加者約3名</p> <p>1-2)：コミュニケーション障害学科から、参加者約5名</p> <p>2：学科教員，大学院生，学部生各回 約30名</p>	<p>テーマ：①FD 講演会発表と参加 ②フロリダ州立大学教授ミシェル・ブルジョワ博士（わが国でいう言語聴覚士の免許あり）による特別講義</p> <p>1-1)：コミュニケーション障害学科教員吉畑が，次の2点「日本語聴覚士養成校教員連絡協議会研修会～学生の心の問題とその対応」と、「大学教員のためのメンタルヘルス維持戦略～カウンセリングの活用（明治大学文学部高瀬先生の講義）」（コミュニケーション障害学科が2008年3月に企画・実施）について，概要を報告した。</p> <p>1-2)：岩手大学大川先生による「学習成果の明確化と成績評価～教育の質保証に向けて～」と題したFD講演会に参加し，今後のシラバス作成や成績評価の参考とした。</p> <p>2についてブルジョワ博士が「認知症の評価と治療への機能的アプローチ」「認知症治療における学習法の比較：間隔伸張法か段階的手がかり法か」「神経学的障害を持つ人に対する行動療法の根拠を評価する」の3つの特別講義を行い，教員や院生等が参加した。</p>
保健福祉学部 人間福祉学科	三原 博光	<p>①4月25日(金) 16:00～18:00</p> <p>②4月26日(土) 9:00～14:00</p>	<p>体育館・調理実習室</p> <p>障害者家族40名 人間福祉学科60名 (1年生～4年生)</p>	<p>テーマ：地域の障害者との交流を通して，学生及び教員の福祉実践能力の構築</p> <p>・障害者家族とのビーチバレーボール・食事交流会</p> <p>学生達は，障害者家族と共にカレーの調理を行ったり，ビーチバレーボールを障害者と一緒に楽しんだ。その際，学生達は，個々の障害者の特性に応じて，支援を行った。例えば，車椅子の身体障害者には学生が車椅子を後ろから押しながら，ボールを打ってもらった。サーブができない自閉症者に対しては，学生が自閉症者の手を取り，一緒にサーブをした。カレーの調理の際，障害児の母親達と一緒に調理をしながら，育児の困難さを説明してもらい，障害児の子育ての大変さについても学んだ。教員は，学生と障害者，その家族がスムーズに交流ができるように調整をし，学生と障害者家族と信頼関係の構築を目指した。この会の終了後，この活動に関するアンケート調査では，参加者のほぼ全員が活動に満足する回答を示した。</p>